



①串本町立トルコ記念館には事故当時の様子を鮮明に伝える貴重な資料が陳列されている。②慰霊祭が行われるトルコ軍艦遭難慰霊碑前のドウルナさん(右)と新見さん(左)。③今も清掃活動を行っている大島小学校のみなさん。

串本町役場
住所/東牟婁郡串本町串本1800
電話/0735-62-0555



トルコ・エルトゥールル号海難事故から130周年

今年は、エルトゥールル号の海難事故から130周年を迎える節目の年です。同事故は、世界の海難史上において希にみる悲劇となった一方、串本町大島の住民は、自らの危険を顧みず献身的な救助活動の結果69名の命を救いました。これをきっかけとして、その後も日本とトルコ両国の絆は深まり、今日においても両国の友好を象徴する有名なエピソードとして語り継がれています。

日本とトルコの友好の礎

今からちょうど130年前、本州最南端の町・串本町大島沖で、オスマン帝国の軍艦が座礁した。その船の名は「エルトゥールル号」。その後、長きに渡る日本とトルコの友好関係の礎となる事件の始まりであった。雨風が吹き付ける嵐の夜、大島に住む高埜友吉は、遭難し血だらけになったトルコ人を発見。鐘を鳴らして灯台に村人を集め、救出活動を始め、「翌朝、たまたま魚の買い付けに大島を訪ねていた私の曾祖母が、その救助現場に直面したそうです。男勝りな曾祖母は救助に協力しますが、大柄なトルコ人は背負っても足が地面についていたようです」と語るのは、串本でジオパークガイドも務める新見かおるさん。そ



慰霊祭は毎年開催されるが、5年ごとに盛大に行われる。写真は120周年時のもの。映画「海難1890」の公開に伴い、日本の自衛隊やトルコの軍楽隊、政府関係者などが多数参加した。

話を聞き、串本町役場でCIR※として働くドウルナ・オスカヤさんがお礼をいう。「小学生の頃、授業でこの話は習いましたが、昔話のひとつくらいにしか思っていました。でも串本に来てみるとビックリ。エルトゥールル号海難事故だけでなく、イラン・イラク戦争時のトルコ航空による日本人救出の話など、皆さんがトルコとの関わり合いを大切にしてくれていて、感謝の声をかけられることもあり、非常に嬉しくまた誇らしく思いました」と檜野崎灯台前のアタテュルク像を見上げながら語った。

お墓として教えられ、自分たちの先祖に手を合わせるのと同じように手を合わせ、掃除していました。また当時、トルコ人たちの治療に三人の医師が無償で対応したというが、住民もさほど多くないこの島に、なぜ三人もの医師が居たのかと聞くと、「大島は現在でも台風直撃のコースで中継されるような場所であり、古くから日本における海路の要衝地でした。特に大島と串本の間は風から避難するのに適した場所、色んな地方の船乗りたちが滞在し、港町として栄えていたからではないかと語る。海と縁の深い和歌山の民だからこそ、遭難した異国人の救助も、当たり前なことだと思っていたのかも知れない。

※CIRとは外国青年招致事業の職種のひとつで、地方公共団体等の国際交流活動に従事している人。



檜野崎灯台前に建つトルコ共和国の初代大統領アタテュルクの像。指差している方向に遭難現場がある。

130年前の悲劇、 日土に今も続く 友好の物語が始まる

エルトゥールル号海難事故



檜野崎灯台は、1870年に初点灯した日本最古の石造灯台。日本の8ヶ所に建造された条約灯台の一つで、檜野崎はそれほど重要な場所であり難所だった。